

減災連携研究センター

第28回特別企画展：伊勢湾台風から60年～あのときの被害

約3カ月の開催期間中、5,000人が来場！

2019年度は、台風19号に伴う大雨による東日本各地での被害のほか、風水害が多発しました。近年は被害を免れている東海地方ですが、1959年9月に襲来した伊勢湾台風では、風水害として明治以降最多の犠牲者（5,098人）が出ています。減災館では、2019年9月25日から2020年1月17日まで特別企画展「伊勢湾台風から60年～あのときの被害・避難・復興の実態に迫る～」を開催しました。本稿では、約5,000人もの方々が来館し、盛況のうちに幕を閉じた本企画展を振り返ります。

企画展のねらい、構成とその成果

自然災害は地域特有の現象であるため、過去の災害に学ぶことは非常に有効です。この企画展では伊勢湾台風を再検証し、被災地の分析から被害・避難・復興の実態を考察することにより、今後の台風被害に備えるための教訓を得ることをねらいとしました。

はじめに、「現象と被害」として、台風襲来による高潮と豪雨に伴う河川の洪水がもたらした浸水状況を示し、電気やガスといったライフライン被害を通じた社会的影

響、被災した方々の避難状況を紹介しました。さらに、甚大な被害を受けた干拓地における復興住宅に着目することで、被災地の復興に向けた取り組みの一端にも触れました。続いて、「背景と要因」では、各種資料から濃尾平野の特徴を概観するとともに、かつて、水害常襲地帯であった輪中集落における人々の暮らしや、近年の地下水くみ上げに伴う広域地盤沈下等、過去から現在における変化を整理しました。被害を拡大・甚大化させた要因の現状を検証することで、将来に向けた大規模・広域浸水に対する懸念を抽出したことになります。

伊勢湾台風襲来後、「災害対策基本法」が1961年に成立し、現在の防災対応を支える体制が確立しました。ここでもその経緯を紹介したうえで、名古屋港の高潮防潮堤をはじめとする社会基盤整備の現状、より強大な「スーパー伊勢湾台風」が襲来した場合の高潮・洪水による浸水想定（愛知県、三重県等）、危機管理行動計画（東海ネーデルランド高潮・洪水地域協議会）や、浸水した場合の迅速な復旧・復興に資する排水計画（国土交通省中部地方整備局）等、近年の各種の取り組みを「教訓とその活用」として紹介しました。

被災状況を伝える写真や映像、それらを扱った新聞紙



伊勢湾台風による被災状況の記録写真（高浜市提供）



減災館第28回特別企画展のチラシ



1961年4月に設立した工学部土木工学科

・避難・復興の実態に迫る～

面や報告書といった既存資料を展示しただけでなく、この企画展のために新たに整理・分析した情報を報告したことにより、企画展に訪れた方々は、身近な地域で起こったかつての大災害を再認識するきっかけを得たようです。なお、本学に所属する教職員や学生にとっては、自然災害から「まち」の安全を守る術を学ぶ土木系教室や建築系教室（現在の工学部環境土木・建築学科等）が、伊勢湾台風襲来後に相次いで設置された事実も知っておきたい予備知識です。

クラウドファンディング「迫りくる！スーパー伊勢湾台風に備えるために」の活用

企画展に先立つ7月1日から9月26日には、「スーパー伊勢湾台風」の襲来に備え、過去に学び、地域の住民の方々とその知見を共有すべく、クラウドファンディング事業を実施しました。この事業では、伊勢湾台風に関する各種資料を収集・電子化して共有するとともに、高潮や洪水などの自然現象、被災地となった濃尾平野の自然的特性、治水の歴史や土地利用の変遷を扱う各研究者、災害資料を収集し活用する啓発・教育機関の関係者から学ぶ「特別シンポジウム」の開催と、かつての被災地をその地で調査する研究者と辿る「巡検ツアー」を実施することを謳っていました。

本事業は、幸いにも、目標額を上回る255.9万円を集めることができました。その成果として、テーマを変えて連続開催したシンポジウム（11月16日、20日、12月21日）、巡検ツアー（11月2日：高潮コース、23日：洪水コース）を実施するとともに、11月13日からは「米国国立公文書館で見つかった航空写真が語る伊勢湾台風被害の全貌」（一般財団法人日本地図センター制作・提供、<https://info.jmc.or.jp/isewan/#9/34.8121/136.9202>）等により企画展を拡充することができました。この航空写真は台風襲来から2週間後に撮影されたものなので、沿岸域からの広域浸水の様子が生々しく確認できます。

自然災害に備えるために

昨今の状況を見ても明らかなように、自然災害に際しては、私たち一人ひとりが自ら判断して危険を回避しなくてはなりません。本企画展で扱った「過去の災害」を正しく理解することは、身近な地域の発災過程や被災状況を具体的にイメージすること、ひいては未来の災害に対し「自らの命を自ら守る」センスを養うことに繋がります。私たちの取り組みに関わってくださった方々の災害に対する見方や意識が変わり、防災・減災が進むきっかけになればと願う次第です。



米国国立公文書館で見つかった航空写真が語る伊勢湾台風被害の全貌
(3m×6mの巨大地図。現在は電子データのみ展示中)